

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

栃木県足利市

○学校名

足利市立毛野南小学校

○学校のURL

<http://kenan.ashi-s.ed.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年2学級 【特別支援学級】2学級 【合計】14学級

○児童生徒数

【全児童数】293人

(内訳：1年生47名、2年生39名、3年生52名、4年生54名、
5年生52名、6年生49名)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

がんばりぬく力 思いやる心

【人権教育に関する研究課題】

豊かな表現力をもった児童の育成

～子どもの気持ちや考えを聴き取り、子どもを支えることができる教師～

○人権教育にかかる取組の全体概要

- 授業づくり（自分の思いを自分の言葉で伝え合う力を育てる指導の工夫）
 - ・人権教育の基盤である毎日の授業を充実させてくための授業力向上プロジェクトの推進
- 集団づくり（助け合い・励まし合い・支え合う学級集団づくり）
 - ・児童理解の工夫と自尊感情を高める取組、縦割り班による仲間意識の育成
- 関係づくり（保護者と教師で児童を支える関係づくり）
 - ・学校だより、学年だより、人権教育だよりなどを生かした保護者啓発
 - ・人権週間を通しての保護者啓発の工夫

3. 特色ある実践事例の内容

(1) 授業づくり

ア 「学びあい学習」の充実

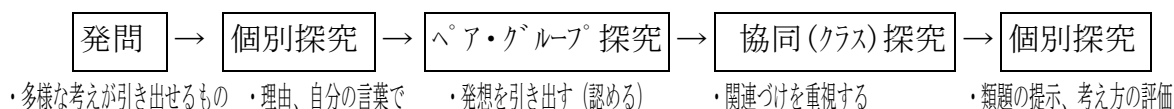
学校教育における人権教育を推進するためには、学校生活の中で一番子どもと向き合う時間が多い「授業」を充実させることが大切である。そのためには、指導者である教師が、子どもの気持ちや考えを聴き取り、子どもを支えることができるようになることが不可欠である。

*グループ探究学習



そのような教師像に迫るため、昨年度までの国語科による授業研究と並行し、子どもたちが主体的に自分の意見を発表しあう「学びあい学習」に取り組んだ。

*学びあい学習の学習過程



できる学力とわかる学力をバランスよく高めていくための課題づくりや指導計画の見直しが必要であることを再確認し、授業づくりに取り入れた。また、外部指導者を招聘し、協同的な探究学習についての学習会を実施し、授業研究会の質を高める環境づくりにも努めた。

イ 授業力向上プロジェクトの推進



※学び合いによる授業研究

人権教育を推進する上では、子どもたちにとって自分の意見や主張が受け入れられる、つまり、安心して学べる授業をつくることは重要である。また、わかる授業づくりに向けて教師が指導力を向上させることは必須の課題である。そのため、授業研究をいかに深めることができるかが重要であると考えて研修の推進に努めている。研究1年目の課題の一つとして、確かな学力を身に付けるためには、一人一人の教師の授業力アップを図る必要があるということを話し合った。人権教育の成立基盤としての教育・学習環境を充実させる取組の一つとして、教師の授業力向上を図ることをねらいとし、年間一人2回以上の授業公開を行った。

(2) 集団づくり

ア 児童理解の工夫

教師が教育実践を振り返るための人権教育チェックポイントの活用方法を見直し、週プログラムに今週のチェックポイントを提示し、週案に各自自己評価した。毎週1つに絞ったため、意識しながら無理なく実施することができる。

- その他…… ○「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」
○児童理解のための事例研究
○いじめアンケート

イ 自尊感情を高める取組

本校では、自尊感情を人権を基盤とした人間関係の形成に欠くことのできない要素と考え、重視している。そこで、セルフエスティーム（充実感・達成感・自己有用感・自己肯定感等）を実感できる活動を積み重ねていくことで、自分のよさや能力、活動を通しての変容等に気付かせ、自分に対する自信をもたせることに努めている。



*音楽発表

♪ あすという日が

- 具体的には…… ○がんばり賞、思いやり賞
○音楽発表、音読発表（学年発表）
○ミニ音楽集会（個人・グループ発表）
○各種行事

ウ 仲間意識の育成



*あいさつ運動
「おはようございます！」

なかよし班活動（異年齢集団活動）では、子どもたち同士の助け合い、認め合いを励行し、思いやりのある子を育成することをねらいとして、様々な場面に取り入れている。異年齢集団で構成するなかよし班の活動を充実させることによって、集団への連帯感を深め、望ましい人間関係の形成を図れるようにしている。

- 具体的には…… ○清掃活動（毎日）
○なかよしサークル（月に1回）
○全校集会活動
○あいさつ運動

(3) 関係づくり

ア 学校だより、学年だより、人権教育だより等を生かした啓発

学校・学年だより到人権教育コーナーを設け、子どもたちのよい行いや、活動の様子などを掲載している。また、そのような行いを教師がどのように感じ取り、どう支えていこうとしているかを伝えている。教師が「子どもたちのよいところに目を向けている」ということを伝えるよい機会になっている。研究課題に迫るための様々な実践を通して、教師自身が考えたことや学んだこと、気付いたことを記録し、保護者に理解してもらえるように発信することは、自己研鑽のよい機会ともなっている。

イ 人権週間を通した保護者啓発の工夫

本校では、夏と冬の2回人権週間を実施している。年2回の人権週間のねらいや活動内容を学校だより、学年だより、人権教育だより等で紹介している。

＜夏の人権週間では＞

- 人権に関わる作文の活用
- 学年部会において人権教育の取組の説明

＜冬の人権週間では＞

- 人権に関わる標語の活用
- 人権に関わる道德の時間の授業公開と話合い
- 学級紹介（給食時校内放送）

*人権週間に聴覚障害者と手話ボランティアを招いての授業



【児童の感想】

☆わたしは、手話が大好きです。それは手話を使うと耳の不自由な人と話ができることをボランティアの方から教えてもらったからです。

☆今日は、うれしいことが2つありました。1つは手話で「わたしは〇〇さんが好きです。」とやったら、「ありがとうございます。」と笑顔で返してくれたことです。もう一つは自分の名前を指文字で表すことができたことです。もっと手話を覚えて、いろいろ話したいです。

ウ 家庭との連携

研究課題に迫るため、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣や正しい生活習慣の確立に配慮することも必要であると考えた。

- 具体的には……○家庭学習のすすめ
- 親学習サロン
 - テーマをもった
学年部会・学級部会
 - 家庭訪問

*親学習サロン

グループで話し合ったことの発表



(4) 教職員研修

ア 同和問題をはじめ様々な人権問題の認識を深める実践的研究

教職員の同和問題の認識の深まりとそれに基づいた実践を目指して、被差別体験者との交流を実施した。今年度は、人権に関わる日常ありそうな場面を事例として示し、小グループによる話合いを行った。また教師としての同和問題や人権教育に対する認識、取組をふり返り、今後の人権

教育に取り組む姿勢を再確認している。

イ 学校間協同推進による実践的研究

市内各小中学校に授業を公開し、実践についての意見の交流を図り、研究の成果や課題を確認した。

4. 実践事例の実績、実施による効果

(1) 授業づくり

- ・本校の人権教育に関する研究課題「豊かな表現力をもった児童の育成」のために、大学教授の指導による授業研究を継続的に行ってきた。その中で、協同的探究学習への取組を通して「わかる学力」と「できる学力」を分けて考え、「わかる学力」を高める授業展開を工夫するようになった。
- ・児童一人一人の実態を把握し、児童に寄り添う事で、児童が必要としている支援を的確にすることができた。その結果、児童の意欲や理解度が深まった。
- ・授業力向上プロジェクトによる授業研究会を通して教師の授業力向上への意欲が高まりつつあり、各教科の習得と活用のサイクルを考えた「わかる授業づくり」のための工夫が見られた。さらに、他の教員の授業を参観する機会が増え、授業力アップにつながる教員同士の情報交換が多くなった。

(2) 集団づくり

- ・様々な活動を通して、児童は、友だちのがんばりや思いやりの行動を見つけるとともに、素直に称賛するようになってきた。そして、友だち同士が互いに高め合い、学級の中における児童一人一人の所属意識も高まってきた。
- ・仲良し班では、清掃活動で上学年が下学年にやり方を教え、助け合う姿や、休み時間に異学年の児童と一緒に遊ぶ姿が多く見られた。また、学級の共遊についての話し合いの中で、全員が楽しめる遊びやルールを決めるなど、児童が意識するようになってきた。
- ・帰属意識や、規範意識が向上してきたことにより、落ち着いた学習への取組、行事への取組が見られた。そして、学習指導のねらいを達成するための基盤ができ、基礎学力が付き、学力も向上してきている。
- ・アンケートや「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」、教育相談の実施により、児童一人一人の悩みや思いを把握することができ、対応を考え児童に接することができた。また、教職員同士が情報交換や情報の共有化を密にすることで、一層の児童理解ができた。

(3) 関係づくり

- ・本校の人権教育について「一人一人の児童に目を向け、大切にせる教育」という前提で、具体的な取組について家庭訪問で伝えるとともに、家庭訪問で出た保護者の声を、職員で共通理解し、その後の児童との関わりに生かすことができた。
- ・人権作文を通して、子どもたちの思いや願い、不安や悩み、そして人権感覚を把握することができた。あわせて、教師がコメントを入れることで、教師自身の人権感覚の見つめ直しもできた。また、人権作文や全校一斉に道德の授業を公開することで、本校の取組について保護者の理解を得るのに効果的であった。さらに

作文や授業をもとに保護者会や家庭内で話し合う機会を設けることで、人権について児童、保護者、教師の三者で話し合う機会をもつことができた。

- ・学校だより、学年だより、人権教育だより等、学校から様々な方法で、子どもたちの様子を発信することで、学校における人権教育を保護者に理解してもらうのに役立った。また様々な実践（教育活動）を通して、教師自身が考えたことや学んだこと、気付いたことを記録し、保護者に理解してもらえるように発信することで、教師の児童を見る目が養われるとともに、自己研鑽のよい機会となった。

5. 実践事例についての評価

（１）取組についての評価、及びそう評価する理由

・研究を進めるにあたって、「授業づくり」「集団づくり」「関係づくり」という三本柱による連携を深めながら、つまり土台をしっかりとやった上での授業研究が行われていた。

・人権教育の根底でもある授業を大切に、子どもたちが安心して居場所のある授業をつくることを心がけてきた。そのために教材研究だけでなく、人権教育の視点から一人一人を見て、学びの様子を十分に把握することを意識してきた。特にA児という一人の子どもを見つめそれを全体に広げていくという感覚をこれからも大切に取り組んでいきたい。

（２）保護者や地域住民からの反応

・自尊感情を高める活動として学年ごとに実施している音楽発表と音読発表を昨年度より保護者へ公開した。本年度は８４％の保護者の参加があり子どもたちの発表に賞賛の言葉掛けをたくさんいただいた。そのため、子どもたちは自信をもって取り組み自己肯定感も高まってきていると感じる。

・日常の仲良し班活動を基本に、月に一度の共遊タイム、あいさつ運動、児童会主催の各種集会において異学年で活動することによって、上学年は下学年を思いやり下学年は上学年に感謝をしながら仲良く活動する姿が多く見られた。卒業式では、卒業していくなかよし班のお兄さんお姉さんを思って、思わず号泣する下学年の姿に、保護者や地域の方から感動の声が毎年寄せられている。

（３）課題

・今後も子どもを見る目が深まり変わることが大切にし、子どもの把握・保護者との関係・教師同士の関わりを深めながら研究の成果を発展させたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

足利市立毛野南小学校

人権尊重の視点に立つ学校づくりを組織的・効果的に進めた事例である。人権教育の基盤としての学習環境を充実させるための教員の授業力向上をめざす「授業づくり」、助け合い、励まし合い、支え合う「学級集団づくり」、保護者と教員で児童を支える「関係づくり」を3本柱としている。

授業づくりでは、個別探求、ペア・グループ探求、協同(クラス)探求、個別探求のサイクルからなる「学びあい学習」の充実を図ろうとしている点に特色がある。集団づくりでは、様々な活動の実施を通して児童間の仲間意識の育成を図っているが、特に児童の自尊感情を高めるための「がんばり賞」、「思いやり賞」、「音読発表」の実施、関係づくりにおける学校だより、学年だより、人権教育だよりなどによる保護者啓発等々の工夫、「親学習サロン」の設置や家庭訪問等による家庭との連携強化の試み等は示唆に富む。